
「大会展望」①

9月に開催された東京世界陸上が終わり、日本のマラソン界は、28年のロサンゼルス五輪を最大目標に、来年の名古屋アジア大会、27年の北京世界陸上に向けて進み始めた。今年の福岡国際マラソンは、27年開催のMGC（マラソン・グランドチャンピオンシップ）の出場権を得る大きなチャンスになる。また、ハイレベルの記録を出すことやMGCシリーズのポイントを獲得することでアジア大会代表入りの道も開ける。アジアや世界へのステップとして、今年も福岡国際マラソンは注目を集める大会となる。

●誰が勝つか？優勝争いが一番の見どころ

日本人出場選手でただ一人2時間5分台のベスト記録を持つ細谷恭平（黒崎播磨）は3回目の福岡挑戦。21年と23年はいずれも日本人トップを取ったが、外国選手に敗れ21年は全体2位、23年は4位だった。記録も狙う必要があったため、レース後半で先頭を走ったが、後続を引き離せず外国勢に勝つことができなかった。「今年は優勝が最優先。勝ちに行くレースをします」と初優勝に意欲を見せている。福岡初挑戦の菊地駿弥（中国電力）は2時間06分06秒（日本歴代11位）の自己記録を持つが、主要大会での優勝や日本人1位は未経験だ。昨年の今大会で2位の西山雄介（トヨタ自動車）は1年前の雪辱を果たしたいところ。丸山竜也（トヨタ自動車）は2時間7～8分台で安定して走っている。鎧坂哲哉（旭化成）は昨年からシドニー、プラハなど海外でのレースでいずれも2時間8～9分台で上位に食い込んでいる。福岡市を拠点とする久保和馬（西鉄）にとっては同僚や家族、友人の声援の多さを力として「MGC出場権獲得」を第一の目標としている。日本人選手による優勝争い、上位争いが大いに期待される展開となるのではないだろうか。

●MGC・アジア大会につながるレース

今年の福岡国際マラソンは、日本人選手にとってはロサンゼルス五輪につながる大会でもある。今大会で日本人6位以内に入り、2時間09分00秒以内の記録を出すことで、27年秋開催のMGC出場権を獲得できる。日本人選手にとっては、この大会でMGC出場権を取ることができれば、今後出場する大会の幅が広がり、強化の選択肢が増えるというメリットが生じる。

また、今大会は来年の名古屋アジア大会選考会にも指定されている。MGCシリーズ2025-26チャンピオンが最優先で選ばれる。2番目の選考基準は指定期間のG1大会などで最も良い記録を出した選手が選ばれる。勝負を優先しながらも、天候など条件に恵まれれば好記録も狙うレースが展開されるだろう。

細谷は21年の福岡国際マラソンの結果で22年の杭州アジア大会代表を決めたが、大会が1年延期になり代表が解除された。今年は大阪マラソンで日本人2位（全体4位）となり、東京世界陸上の補欠代表となったが出番はなかった。西山は22年のオレゴン世界陸上に出場したが、24、25年と2年連続で代表入りをあと一歩で逃している。昨年の福岡では2位で、優勝した吉田祐也（GMOインターネットグループ）が東京世界陸上代表入りした。細谷、西山ともに代表入りへの気持ちは強い。

●福岡や日本の大会で実績のある外国勢

外国選手では、出場選手中最高タイムを持つのがゴイトム・キフレ（エリトリア）で、21年のバレンシアマラソンで2時間05分28秒（6位）をマークした。翌年もバレンシアを2時間06分09秒で走り、五輪&世界陸上も21年から3年連続で出場した実績を持つ。豊富な経験が福岡でも発揮されそうだ。

イブラヒム・ハッサン（ジブチ）は23年の別大マラソンに2時間06分33秒で優勝した選手。今年も4月のパリマラソンで、2時間06分13秒の2位と好調だ。

ヴィンセント・ライモイ（ケニア）とマイケル・ギザエ（ケニア）の2人は、福岡国際マラソンで強さをを見せてきた。ギザエは21年と23年に優勝。21年は細谷を終盤で引き離し、23年は中国人選手に1秒競り勝った（2時間07分08秒の自己新）。ライモイも22年大会に自己新記録（2時間07分01秒）で2位に入っている。

勝負に意欲的な日本勢と、福岡や国内大会で実績のある外国勢。今年の福岡国際マラソンも30km以降で激しい戦いが繰り広げられるであろう。その戦いの中でそれぞれの自己新記録も多く出るレースとなることを期待したい。